

みなさん、附設中学卒業おめでとございます。

附設中学校の卒業式は、原則として、卒業生は附設高校に進学することが期待されておりますので、今朝ありました修了式と実質においては変わらないとわたくしは考えています。中学卒業式を昨年から大幅に簡易化した理由ではありませんが、もちろん、生徒の中には、中学までは調子はよくなかったが、これを機会に一から頑張ろうという人もいるでしょう。実際に頑張ってみせることが大切だと言っても、こういう気持ちに目覚めることが大事です。ですから、そういう人がいれば、それはうれしいことです。

簡易化という点では、まだ、簡易化すべき余地は大いにありますが、しかし、卒業式と銘打った式典である以上、修了式とは趣旨の違う話ができる機会でもあります。みなさんにメッセージとして何が伝えられるか、それを考えてみました。この後で渡されるのだと思います。「附設高校生になるために」の巻頭言で、昨今思っていることを、ある程度は書きましたが、そこでは書かなかったことを陳べましょう。

みなさんには、特に、未知のことへの挑戦において、堂々と、毅然と、立ち向かってほしい、と申し上げたいと思います。堂々とするとは、一体どういうことか。堂々と毅然とを並べて申し上げているわけですから、これらは目先のことではありません。流行に振り回されるな、とか、他人の意見に軽々に従うな、というような、禁止を意味しているようでもあります。そうではなくて、自分の力や見識というものをしっかりと養え、そして、それらに対する自信を持つということです。その結果として、自分にはこれが見えている、これは必ずできる、という、そういう確信が自然に身に付いてきます。

こういう自信、しかも、根拠ある自信は仕事をする上でもっとも大事なもののなのです。当然ながら、このためには、自分を鍛えなければならず、さらに、その鍛え方の質が問題になります。しかも、人から宛てがわれた基本的に既知の課題、例えば、試験問題は典型ですが、そういう目先の課題に対する姿勢のことではありません。そういうわけで、附設に在籍している間にここまでの力を養いなさい、ということではありません。しかし、こういう確信を産み出す、基礎の部分だけは、心がけて作っておかなければなりません。しかも、ここは自分でやらなければなりません。つまり、授業―試験、といった通常の教育訓練だけでは不足で、自分だけの経験を活かしながら、感覚を深めていく必要があります。試験問題は、解けて当たり前、もっと深くもっと先まで読み通せるだけの力の基礎をぜひ養ってください、それも、自らの力で、ということ。よろしくお願いします。

以上で、わたくしの式辞は終わります。